令和７年度《楽しむ読書活動から味わう読書活動へ「味読のすゝめ」》

読書活動への扉を開く！

Ｎｏ．R7-5　　桑村小学校　令和７年９月１０日　文責：関口　直

本を通して戦争や平和について考えよう！

今年の夏は、戦後８０年ということで、終戦の日を中心に、テレビ番組で特集が組まれたり、図書館や書店などで戦争について考えるコーナーが設けられたりしていました。夏休み前の学校だよりでも、戦争を知る世代がどんどん減る中、子供たちに平和の大切さをしっかり語りつないでいくことの大切さを訴えさせてもらいました。火垂るの墓などのアニメやドラマ、歴史を紹介する番組など、様々あった中で、私が大きな衝撃を受けたのは、ＮＨＫスペシャルで８月６日に放映された、「広島ラウンドゼロ 爆心地500m 生存者たちの“原爆”」という番組です。題名の通り、爆心地から500m圏内にいたにも関わらず、奇跡的に生き延びることができた７８人の詳細な記録をもとに、爆心地でどのようなことが起きていたのか、その光景に迫った内容です。爆風や熱で一瞬にして命を奪われてしまう人たち。たとえ生き延びられたとしても、そのあと放射線被ばくによって様々な健康障害に苦しみ、次々と亡くなっていきます。原爆が本当に恐ろしいのは、生き延びられたとしても、死ぬまで病気と戦い続けなければならないという現実です。78人が語った声がテープとして残されています。これは本当に貴重な記録であり、後世に残していくべきものだと強く感じました。

広島原爆の日に、広島県知事は、核による抑止が意味ないものであることを訴えていました。核抑止のためにいったどのくらいのお金が使われているのか。そのお金があればもっともっと核なき安全保障の構築が図れるのではないか。一方で、もし、他国から攻められたらどうするのか。それに対抗できる武力を持つ必要があるし、それは国家として当然の権利であるという主張もあります。どちらも、平和な世界を作っていくという目的は共通しています。そのためにどうすべきなのかという点に違いがあります。

ロシアとウクライナの戦争を見ていると、武力行使をされて、何も抵抗できなければ、占領され、国家がどんどん失われていくという恐れがあることは確かです。しかし、もし、周りの国がロシアやウクライナに協力しなければ、どれだけの命が失われずに済んだでしょうか。大切なのは、人の命なのか、それとも国家なのか。国家がなければ人は生きていけないのか。人がいなくなれば国家そのものは成り立ちません。そもそも、このような二者択一にしてしまうことに問題があるのかもしれません。

平和について考えるとき、まず大事にすべきは、事実として何が起きているのかをできるだけ正確に知ることです。10万人が亡くなったというと何かまるで現実味がありませんが、自分の身内が亡くなれば、どんな人だったのか、周りの人がその死を悼む様子など、ありありと想像できます。１００万人亡くなったのと、９９万人亡くなったのでは、そんなに違いはないって思ってしまうかもしれませんが、１万人の違いはかなり大きいはずです。数字や文字で示すことは必要ですが、それだけでは伝わらないこともあります。『この国の戦争』（左）という本では、物語にしなければ歴史を理解するのは難しいが、物語

にすることは危険も伴うと訴えています。例えば、皇国史観という歴史観、まさに物語によって多くの人たちの考え方が個人の命より国家が大事であるとされました。私たちは表面的な空気（物語）に流されることなく、しっかりと事実を見つめ、先人の声に耳を傾け、みんなで語らいながら、平和について考え続けていくことが大切ではないかと思います。

直接話を聞くことができればいいのですが、その機会も限られていることから、子供たちには、戦争や平和に関する本に多く触れ、自分の見方・考え方を豊かにしていってほしいと願っています。

学校の昇降口には、桑村小図書館にある平和について考えることができる本を紹介しています。また、学校司書さんに頼んで、何冊か本を紹介してもらいました。知恵の和館の本もあるので、借りて読むことができます。戦後８０年という節目の年。薄れゆく戦争の記憶をしっかりと引き継いでいくためにも、様々な本に触れてほしいと思っています。

『そらいろ男爵』　ジル・ボム文　ティエリー・デデュー絵

そらいろ男爵の落とす爆弾は、何と本でした。武器として使われた本ですが、それが意外な方向に戦争を向かわせます。文化による交流の大切さ、戦争なんかより大切なことを知るきっかけになる本です。本を読むことのできる国語力や読解力は必要であるということを考えさせられました。

『もっと　おおきな　たいほうを』　二見正直作

相手より強くて大きな大砲を作らなければという思いが、とんでもない方向に進んでいき、信じられないような不思議な大砲が作られます。とてもこっけいな争いですが、最後は愉快な落ちが待っています。

『せんそう』　　エリック・バトゥー　作

こんな些細なことから仲のいい国が戦争になってしまうとは。王の身勝手な振る舞いによる戦争ですが、子供たちの力が平和をもたらします。どんな複雑な戦争も、きっかけは意外と単純なことなのかもしれません。

『せんそうがおわるまで、あと２分』　ジャック・ゴールドスティン作

２分差で生まれた兄弟。２分遅く生まれた弟はいつも兄に置いて行かれます。しかし、戦争になったとき、その２分差が兄弟に大きな運命の違いをもたらします。戦争の無情さについて、考えさせられる本です。

『戦争のつくりかた』　りぼん・ぷろじぇくと

戦争をふせぐのではなく、どうやったら戦争が起きるのかを具体的なできごとをもとに明らかにしていきます。世の中がどうなる戦争に向かっていくのかを知ることができる本です。